

二宮尊徳(幼名：二宮金次郎)といえば、戦前の修身の教科書に必ず登場する孝行、勤勉、学問、自営の4徳目を体現する人物として顕彰されている江戸後期の農政家である。昭和に入ってからは、薪を背負って書を読む少年金次郎の像が全国津々浦々の小学校に建立された。今でもその像が残っている小学校がある。十勝も例外ではない。豊頃町には二宮地区があり、概地区は、二宮尊徳の嫡孫であった二宮尊親が開拓団を率いて移住した地である。勿論二宮金次郎の銅像は今も残されている。尊徳の嫡男であった尊行も尊徳の意思を継いだ徳の人であり、親子3代に亘り、徳行を積んだ家系である。



(写真は、左から、二宮構造改善センターにある二宮金次郎像、郷土資料館の記録書類の原本の一部、報徳二宮神社である。)

過日、豊頃町の二宮地区を訪れ、二宮神社の氏子総代をしているという地域の方と出会い、色々な話を伺うと共に、貴重な資料など見せて貰った。その要点を幾つか紹介しよう。

- 二宮神社が建立されている地は、尊親が二宮地区を初見して移住を決心した縁の山である。即ち、北海道開拓の適地を探していた尊親が、好条件の地を見つけられずに失望していたところ、大津の港でアイヌに出会い、未だ開拓の鋤の入っていない地があると連れて来られて高い山に登って一帯を一望したと伝えられている。神社の地こそ、正にその地である。
- 二宮地区を一望した際に舶来物の遠眼鏡を使ったけれども、その遠眼鏡はかの総代の母方の父が尊親から貰ったもので、今でも保管しているが、現在は、帯広在の親族が持っている。
- 二宮郷土資料館には、尊親の10年間における金銀帳や各種の記録の原本が陳列してあったが、特別の保管方法が採られているわけではないので、貴重な資料が長期確実に保存され得るかどうか一寸心配だ。尊親が使ったと思われる布団や衣類が「尊親遺留品」として保管されていた。
- 神社の建立の為に地区の人々は10銭ずつの積み立てを行い、大正5年から5年間で掛けて住民の労力提供により神社を建立した。以前は遥拝塔があったのみだったという。栃木県今市の報徳二宮神社から分祠を受け、報徳二宮神社とした。尊徳の羽織が宝物として桐箱に保管されているが、触るとぼろぼろになりそうで見るしか出来ない状態とか。ちょっと残念だ。モッコで土を運んだというのが、モッコと言われてわかる人は年代が解る？
- 報徳訓が掲げてあったが、氏子総代の方によると「貧富訓」というのもあるそうだ。参考までに、報徳訓を紹介する。

「父母根元在天地令命	身体根元在父母成育	子孫相続在夫婦丹精
父母富貴在祖先勤功	吾身富貴在父母積善	子孫富貴在自己勤勞

身命長養在衣食住三 衣食住三在田畑山林 田畑山林在人民勤耕
今年衣食在昨年産業 来年衣食在今年艱難 年々才々不可忘報恩

- 『ある人曰く、「依田勉三と晩成社ばかりが十勝開拓のパイオニアとして持て囃されているが、二宮尊親の方がその精神や開拓仕法において理想高く、陸別開拓の先駆者である関寛斎（後述参考）も教えを乞うており、もっと名声高かるべきだ」と言われたが、・・・』と後は言葉を濁されたが、そこには奥ゆかしさがあるようだ。

我等が訪ねた日は、昨年二宮地区の小学校が廃校になったとかで、今年は小学校の運動会の代わりに地区の運動会として催したその日であった。その打ち上げが地区の構造改善センターで行われており、その最中に、小生と家内が『二宮尊親について資料を見たい』と申し出たという次第である。当初怪訝な顔をされたが、快く見せて頂き、話も聞かせて頂いたということである。非常に親切な方々ばかりで宵闇も迫る頃で肌寒かったけれども、心は暖かった。

* 関寛斎(1830～1912)

徳島の人、72歳にして御典医、町医者としての榮譽を捨て、陸別斗満に移住、自作農を創設すると共に理想的農村村落建設を目論むが、志半ばにして大正元年に死す。

以下、三代の徳行の一部を紹介しよう。

I 二宮尊徳

尊徳は天明7(1787)年小田原在栢山(かやま)生まれ、少年時父母を失い、伯父の家の手伝い、苦しい農耕をしながら所謂「四書」を独自に学んだ。青年期に家を再興、その後、小田原藩士服部家や藩領下野桜町の荒廢地の復興に成功した。この経験をもとに独特の農法、農村改良策を編み出し、関東のおよそ600村の復興を成し遂げた。尊徳の精神は報徳思想として広まった。内村鑑三も代表的日本人の一人として、農民聖人として高く評価している。報徳二宮神社が建立され県社となっている。

尊徳は、67歳のとき、幕命により旧日光御神領89個村の村おこし、復興開発事業に従事したが、志半ばにて他界した。

尊徳の4つの教え「至誠、勤労、分度、推譲」プラス「積小為大、一円融合」は、今こそ推奨されるべきではないだろうか。

氏子総代の方も話しておられたが、尊徳が後世これ程に有名になったのは、尊徳の高弟であった富田高慶の存在があると思われる。彼なくして尊徳の各地での仕法も、彼の思想や人物が、「報徳記」として編纂される事もなかったであろう。明治天皇に奏覧され、絶賛を頂いた。

II 二宮尊行

尊徳が日光御神領89個村の村おこし、復興開発事業に従事していた間、嫡男弥太郎「尊行」は尊徳から工事の直接指導を任された。

尊行は、父の徳行を継ぎ、福島の中村藩相馬侯から招かれ、30年計画で「興国案民法」推進中、明治維新となり、中止された。

Ⅲ 二宮尊親

摘孫「尊親」は、祖父尊徳の報国精神を受け継ぎ、大志を抱き、十勝開拓の黎明期の明治30年(1897)福島県から豊頃村牛首別に開拓移民団を率いて移住、「興復社」二宮農場を創設した。爾来、理想実現のため、粉骨砕身努力を惜しまず、公德心の高揚、生活改善指導、知徳の啓発等に努めた。入植10年にして成功を収め、167戸、780名の受け入れ、開墾面積900余町の実績を収めた。報徳仕法の基本理念に基づき築かれた見事な理想郷となり、十勝地域の開拓団体の中でも異彩を放っている。

今も、豊頃町の中心地茂岩の西外れにある曹洞宗の放光寺の南には二宮尊親先生住居跡の標識が立てられている。茂岩市街から南西6kmの一带は、二宮地区といわれ二宮構造改善センターには尊親関係の資料が展示されている。尊親の銅像も建立されており、近くの小高い岡には二宮神社が建てられている。

(参考：百科事典、元特科連隊情報中隊の隊員編「十勝の石碑」、北海道の歴史散歩、各種のHP)